第11回
バルセロナ／スペイン
Barcelona Spain

何度行っても ワクワクさせられる街

リクルート=スタディサプリ講師 村山秀太郎

互いへの不信感が極まって

9月11日。この日は2001年ならニューヨーク同時多発テロの日だが、1714年ならスペイン・カタルーニャ地方が独立を宣言した日となる。この年、スペイン継承戦争が終了、マドリードのハプスブルク家が断絶し、フランス・ブルボン家のルイ14世の孫が即位する。しかし、ハプスブルク家支持のカタルーニャ(バルセロナ)はそれを拒否、マドリードとの対決を宣言し“確執”が始まった。ブルボン家はもともとスペイン・ナバラ地方の王家。マドリードのブルボン朝はバルセロナ港にサメを放流し威嚇した。

その300周年が2014年9月11日。スペインサッカー1部リーグ、FCバルセロナはメッシとネイマールを先発させた13日のビルバオ戦で、ホームスタジアムのカンプノウでの試合にもかかわらず、黄色と赤のボーダーカラーのカタルーニャ国旗サニェーラをかたどったアウェー用の第3ユニフォームで試合に臨んだ。カタルーニャ州の経済規模はスペイン全体の5分の1。これはポルトガル一国と同規模だ。

金のあるところは、金のないところを自分の金で食わせたくないのが現実世界。カタルーニャの人々は、自分たちの税金で南部アンダルシアや西部エストレマドゥーラの経済を支えたくない。ついでに言語も文化も他地域と“異なる”と自覚する。

カタルーニャ州はプレ・ロマネスク建築の宝庫だ。最古のロマネスク様式は、フランス中南部にあるクリュニー修道院だが、中世そこから教会刷新運動が始まった。10世紀のローマ教皇およびカトリック教会は著しく道徳的に頽廃していたのだ。しかし、聖が俗を凌駕するある種のストイシズムが台頭し教皇権が伸びはじめると、教会は凶暴性を帯び、十字軍は大量虐殺を生んだ。その背景にあったのが「完全贖宥」という教義だった。教皇アレクサンデル2世は1064年に、スペインのアラゴン王国がバルセロナ西方のバルバストロでイスラム教徒と戦った際に、この戦いの参加者の生涯にわたる贖罪の完全免除を約束する。ヨーロッパ中世の教会がらみの殺戮が異端審問だが、もとはといえば、マラーノと呼ばれたキリスト教に改宗した転向ユダヤ人を取り締まるために、スペインのユダヤ社会とドミニコ会修道士トルケマダのコラボレーションでなされた弾圧が組織的な異端審問の起源である。トルケマダはその後、カトリックのヒエラルキー(位階制度)をかけ上がる。互いへの信頼と連携なくして成り立たない華麗なるパスサッカーの国スペインの、最大の“世界史遺産”は、互いへの不信感が極まり始まった「異端審問」だったのである。